日本庭園における Aging の美と意味について

進 士 五 十 八 *

The Beauty and the Meaning of Aging in Japanese Gardens.

Isoya SHINJI

摘要：Aging は古びることの意。本論は日本庭園の精神的特質の代表的側面とされてきた“わび・さび”の現代的解釈を Aging 概念を導入することによって次のように結論した。モンスーン気候高温多湿風土下では自然材が時間経過によって Aging がかかり、風化変質腐朽してゆく。“さび”の語源にその意味が含まれるようにこれを日本の風土文化の美意識は評価した。時間美としての Aging は西洋庭園意匠に人工の廃墟が用いられたように造園の本質的要素でもある。

1. 結 言

本研究は、日本庭園の特質について、出来るだけ平易で、一般的な用語と常識的な理論をもって論じようという試みであり、特に一般的な用語法で説明されることの少なかった精神構造面からの特質について考察するものである。

金子九郎の「日本庭園試論（1968）」は、極めて秀れた論理性を内包した庭園論だと思われるが、日本庭園の特質については、先づ「従来、もっとも主要なものとして、“わび・さび”が説かれてきた。」¹⁾と述べて、精神的側面の意義を肯定するが、むしろ「“わび・さび”の基盤にあるものとしての“デコラティブ（調和・対比・安定など、より美しい形を求めて……の意で）”こそが重要な特質である。」²⁾として、直接、日本庭園における“わび・さび”の解釈は示していない。

また、丹羽鼎三は「西洋人の日本庭園観は、形式的、表面的であり、幼稚なようにさえ感じられるが……」と「しながらも「彼ら西洋人には、日本の写意庭園はヴォリュームに乏しく、空間の利用に欠くところ多く“monotonous”で“lonely”で“gloomy”だということになるのであろう。」³⁾と述べる。ただ、その意味を「単調な’、’さびしい、人里はなれた’、’うすぐらい、沈んだ、ふさぎこんだ’などに置きかえたとして、不十分な理解と考えると、形式的なことは比較的理解しやすいが、形而上のことはとりつきにくい。またとりつき得ても、なかなか解し難いものである。」⁴⁾と付言しているのである。

たしかに、みやび・あはれ・幽玄・わび・さび・しほり・ほそみ・かるみ・粋……などの日本美の問題を外国

人に完全に理解させるような説明は不可能にちかい。

日本の特質としての精神美についての研究⁵⁾⁶⁾で一領域をなす現状では、丹羽の感想は当然のことであるが、筆者はむしろ彼らの言葉の“LONELY”や“GLOOMY”に、単純化して一般に通用する“わび・さび”論の展開の可能性を見い出したいと思う。少くとも、曖昧な説明や理解し難い言葉でばかりするような形で、日本庭園の美への解釈はあり得ない。又、ある程度に外国人にわかる説明が現代的解釈でなければならない。

本論は日本庭園の精神的特質を、古来言われてきた“わび・さび”に対する解釈を現代的にとらえるために、エージング（AGEING）という概念を導入することで、日本の風土下で自然石など自然材が時間的経過のなかで変質してゆくことの結果もたらされた“時間美”として把握できること、更には、時間美は西洋庭園意匠に“人工の廃墟”がなされたように、人間が本質的に欲求する性格のもので、造園における極めて重要な価値であること、つまりは、日本と西洋では気候の相違があって、表面にあらわれる現象に差があるだけで、造園の本質として“時間的積層性Aging”の存在が指摘できること等について考察するものである。

2. 時間美の概念としての Aging とその意義

Ageing, Aging, エージング 岩波・英和大辞典（中島文雄, 1970）によると、Ag(e)ingの意味は、〔年をとる、ふける、古くなる、かれる、年をとらせる、ふけさせる、古くする、からす、熟成させる〕となっている。

* 東京農業大学造園学科

つまり、形容詞として〔古びる〕か、名詞として〔古びること〕、〔熟成〕の意味をもっているだけで、特別に、例えば「好ましい」価値を含んだ概念ではない。

従来の価値観によれば、むしろ〔古くなる〕は〔老化・風化〕や〔劣化〕に通じるので、否定的な意味あいを含んだものと解釈するほうが自然であろう。

強いて言えば、ディズニーランドの古城や西部劇の舞台になる開拓時代のまち等を再現するような場合の擬装技術(Character painting又はPainting and Aging)として、あるいは妻籠宿などのファサード保全技術としての場合などは、積極的価値をもっていたといつてよい。

この場合、時代劇の舞台イメージをつくるためにのみそれらしく再現しようとするのだろうか。それは単なる汚れや風化したイメージの再現が目的ではなくて、時の流れを感じることで、惹き起こされるであろう「人間にとっての、時間の意味や、歴史からの感傷作用(精神作用)」を期待してのことではないだろうか。

遊園地の古城や、観光地としての町並みにおいてのみ「時の流れを感じさせることの価値」が認められるのではなくて、人間性(Human nature)そのもののために「時間を感じれること・時間美」の価値が認識されていられればこそ、また求められているからこそ、人為的に構成された時間的積層性表現装置空間が商品価値を期待されて遊園地や観光地にも計画される、と考えるべきなのである。

以上の価値を「時間美」と定義づけるならば、時間美は今や社会的・時代的価値にもなっているといえる。

従来のデザイン論は、デザインの操作と評価の要素を〔形態・色彩・規模〕という、いわば空間的要素に偏したものでありすぎた。甚だ比喩的であるが、新聞のコマーシャルに、「どこかで「時間」というものを売っていて、「香りのよい時間・詰合せ」とか、「静寂のひととき・1本詰」とか、美しい包装紙にくるみ、「おいそがしくご活躍のことと思ひ、わずかばかりですが」などと、贈ることができたら、どんなにかよいだろう。」というのがある。このコマーシャルのコピーは、いままで、時間というもの、自然に流れゆくもので、人間の側では何ら打つ手のない、考える対象にもならないものである、という常識からの転換を示唆している。アメリカで、素晴らしく齢をとるための学問として「加齢学(ジェロントロジー)」の研究が進んでいるが、先のコピー共々、Agingの価値が時代的且つ相対的に増加していることを傍証するものと言えよう。

3. 風土と時間による庭園美——わび・さび

金子の言うように、日本庭園の心——わび・さび、という説明が常である。しかし、この言葉を使用されても何ら具体的なイメージは描けない。日本の風土に住むもののみが、ボンヤリと描ける雰囲気ではない。

数江⁷⁾の例解はよくわかる。「……沖縄から来たひとにきかされた感想である。冬枯れの東京に来て灰色につつまれた風景を見たとき、なんとうす汚れた風土なんだろうと驚いたが、それと同時に説明されてもわからなかった「わび」とか「さび」について、突然に、ああこれだ、とわかった気がしたというのである。」「ヨーロッパ人にとって色は原色のことで、くすんだ色は色らしからぬ色にちがいが無い。わびもさびも、くすんだ色の風土に育ったものにのみ通じる特殊な、ローカルな美意識であろう。」

たしかに、上記の例は、よくわかる「わび・さび」の説明である。ただ日本庭園においても、この説明で十分であろうか。

真新しい庭はくすんだ色にはなっていないのである。筆者自身、北宮庭園。平城京左京三条二坊六坪の池庭遺構を眼前にみて、「わび・さび」を感じなかったのである。単に日本風土にあれば、全て「わび・さび」を感じるというものではない。

それは、「淡みとなまなましさ」について語る岡本太郎⁸⁾の言い方で納得できることである。

「……書画の場合も文学の場合も、奇妙に人生を達観し、今日の現実から離れてしまったような味わいが出てこないとはめません。それが「枯淡」とか「しづみ」とかいて日本芸術の最高の味になっているのです。……音曲などでは、年とった家元や師匠の芸風を尊重するゆえか、どんなに若い人が歌うときでも、年相応の生々しい声は出しません。年よりのしわがれ声をまねて、淡く押えるのです。……芸術が極めて高いもの、深いもの、凡人には到底およぶもつかない大変なことのようになり神秘化されています。……私は、はっきり言います。芸術なんて何でもない。あるがまま、見えるがままにある、そういうものです。すなおに見れば、これほど明快なものはないはずです。……」

つまり、岡本は若い人がしわがれ声で歌うのは「芸」ではあっても「芸術」ではない。「芸術」は明快なものだという。「芸」では時間的経過が価値になる。

北宮庭園は、1975年以降3回にわたって発掘されたものである。護岸の石組も葺石も地中に埋れていたものが掘り出されて真新しい。⁹⁾ 植栽などがまだ無い事情もあるだろうが、極めて軽やかな、それでいて力強いおおらかさを感じさせてくれる。

岡本の言い方を借りれば、発掘庭園は真新しく「芸」にはなっていない。ただ石組そのものの見事さという点で、それ自身「芸術」になっていたように思える。

おそらく、日本庭園には、時間の積み重なりによってくすんだ色がもたらされて遂に「わび・さび」にいたったものと、元来高い芸術質を付与されるように構成されたものに時間が加わり「わび・さび」を醸成しているものの二通りがあるのであろう。北宮庭園は、発掘された

ままの姿で保存したために、Aging の無いままでも力強く構成されている庭園が存在すること、Aging が加わることで“わび・さびの美”を庭園にもたらしてきたことの2点を教えてくれたのである。換言すれば、空間美・造形美と“わび・さび”の時間美は別体系のものであること、“わび・さび”は、庭園の構成形態とは無関係のいわば材料レベルの、或いは時間の経過という条件で獲得される庭園美であるということになる。

4. 「然び」の語源と「時間的経過」

本論の目的は、“わび・さび”という外国人にわかりにくい概念を、“Aging”という外国人にもわかりやすい概念によって説明することが出来ること、そして、それは内容的にも日本の庭園美の説明として妥当性が高いことを立証することである。

さて、そこで膨大な“わび・さび”論考から大枠での整理をした上で、特に“さび”の語源について検討し二三の基本事項を指摘することにしたい。

“わび”の原義には恋や愛が満足されないことからくる“わびしさ”、それが社会的疎外感や孤独感へ発展した美意識としての“わび”がいわれている。¹⁰⁾ 他方、“わぶ”という動詞が名詞化したもので、本来は、心細くものがなしい、うらぶれた心境をあらわす言葉であったものが、中世末以後積極的意義を発見し、不完全の美、或いは非限定美を発見することが出来る態度や心の状況を説明する言葉になった、とする説¹⁰⁾¹¹⁾がある。

それは、紹鷗の「正直に慎しみ深くおごらぬさまを侘という」にみられるような、心の奥をつきつめていって得られる窮極の姿、いわば「極限」を追求してゆく美意識としての“わび”に向う。

“わび”は、通常、茶の湯精神を、“さび”は芭蕉の俳諧における文芸精神を表現するのにつかわれるが、両語を抱き合わせたり、同義語として扱ったりすることも多い。しかし、“わび”に極限へ向う「時間的経過」の意味が含まれているように、“さび”には、より明確な「時間的概念を含んだ美的概念」としての意味があり、その点での共通性がある。

“わび”とはちがって、直接的に時間的経過性を内包している“さび”について以下述べてゆく。

河野喜雄¹²⁾は、“さび”の本義は“然び”であって、決して“寂び”ではない、とする。「然(しか)」の、日本の古典文学における用例を検討すると、「然(しか)」は音変して「さ」となり、「然(さ)び」は「然(しか)び」、即ち「然るべき」・「それらしい」状態を示す言葉、英語では「So-like being」となる。つまり、第一義は「内部の本質が外部的に表顕されること」となり、その用例を5つに分けて説明すると、① 翁さび・少女さび、② 庭園・林泉のさび、③ 古諺「身から出たさび」、④ 金

属のさび、⑤ さび土・さび壁・さび鮎・さび月毛、などがある、いづれも事物の「本質の表顕」を説明している、という。そして、①～⑤のうち⑤以外の四例は全て、その「然び」の発生までに一定の時間的経過を必要としている。『大言海』の“さび”をみると、「宿」、「老」、「古」の語義があるとしていて、文字通り、宿老古の概念には「時間的経過」が内包していることを知る。

すなわち“さび”を“然び”と考え、“然び”の語源にこめられた意味を考察すると、第二次的派生の語義に「時間的経過」の必要を発見できるのである。

この点をやや詳細に、前出の②庭園・林泉さび でみてみよう。¹³⁾

「庭園は、自然の山水を模倣した人工のものであるので、その当初においては、どこともなくこぢなく、本物の山水のようには見えない。ところが、数年月を経過すると、樹草も根つき繁茂して自然生と同じく、岩石も鮮苔を纏って、宛然、天然の山水然となってくる。本物ソックリ（ソックリ、シッカリ→然りの口語的音変）となるわけである。」

尚、河野は④の金属のさびは、「金精（さび）」とも書かれ、「金属の精気の噴出」まさに「内部の本質の外部的表出」ではないかとだけ指摘しているが、筆者は、二次的語義の「時間的経過」によって鉄分などが酸化することの意味で“さび”を捉えたと、よりAgingに近い解釈になると考えている。

5. 湿気風土の腐朽世界 — Aging と錆び

鉄がさびるというのは、空気中の二酸化炭素と水が炭酸鉄を生じ、さらに水と酸素によって水酸化鉄と二酸化炭素になり、この変化を繰り返して酸化鉄の水化物を生じることである。銅も同様に酸化物になるが、湿気と二酸化炭素のために塩基性炭酸銅いわゆるロクショウになって安定する。鉄のさびは、錆や錆の字が当てられ、金属が酸化した結果、変質することを指すのであって、決して良い意味ではない。化学的には“酸化”だが、普通の言い方をすれば“腐る”ことと同意である。

鞍馬石などがさびた感じになっているというときは、花崗岩の中に含まれている鉄分が酸化して、表面に酸化鉄が形成されてゆくことを意味すると同時に、もうひとつ時間的経過のなかで石の表面が風雨にさらされ苔むしてAging がかかってゆくことを意味する。一般には、この両方を共に“さびてゆく”というのである。そして、さびてゆくためには、空気中に高い湿気が存在する必要がある。つまり、自然石の中にある鉄分か、空気と水分と時間の存在かの、いずれか又は、双方が“さび”をもたらすのである。

第1図は、高温多湿の日本の風土下で、社寺の宝物保存を如何にすればよいかを研究した大江新太郎の研究遺

第1図 腐朽世界風土としての日本（大江新太郎（1934.5）進士調整）

稿¹⁴⁾のデータを筆者が若干調整したものである。

大江は物の腐朽は細菌の繁殖によって始まり、繁殖作用は湿度と温度の2条件でまきまことに注目して、細菌の勢いが極大の季節を“腐朽世界”と呼び、細菌の繁殖が始って勢いがつくまでと逆に極大から下火になるまでの季節を“黴の世界”と呼んで、そのいづれでもない乾いた季節と3区分して図化する。こうすることで、日本の代表的地域が全て、如何に年間を通じて“黴世界”と“腐朽世界”の中にどっぷりつかっているかがわかる。

当然のこととは言いながら、モンスーン気候下において高温多雨多湿にさらされている日本では、欧米のように、“腐朽世界”無し或いは“黴世界”わずか、というのとちがって、日本中のあらゆる物の世界は“腐る”ことにさらされているということである。

換言すれば、日本の風景のあらゆるものは“腐る”，そして“さびてゆく”。時間の積み重なりで、尚一層腐り、さびることが促進される、といえる。

そんな中に一生を過ごそうという日本人は、当然なが

ら、そんな“腐った風景”，換言すれば“さびた風景”を“いい風景”だと見、また認めてゆこうとする筈である。風土の中で培われる美意識は、当然その風土を肯定する形で形成されるものである。肯定しないで、自らの風土から脱却することは出来ない。生存環境を拒否することは、生物の死を意味するからである。それならむしろ、住めば都として肯定し、その中に新しい風土文化の美を育てることが好ましいのである。

ともあれ、日本は“うるおいのある”と呼ばれるような“湿気（しめりけ）のある風土”であり、それはとりもなおさず、あらゆる物を時間的経過（Aging）が“腐朽させる”し“さびさせる”ことを意味し、それが日本人をして“さび”を肯定し、“さび”という美を育てる文化を形成させたのである。日本建築の特質が、木造の開放性による日照・通風に何よりも配慮した形を生みだしたことに由来するとみるならば、日本庭園の特質は、むしろ湿気を肯定しながらゆっくりとした自然と共に変化してゆく時の流れにのる“さび”即ち“Agingの美”を結果

したものと理解できる。

以上のように考えてゆくと、アジア・モンスーン下の他国でも同様の“Agingの美”を見出さなければならない。そこで一例を中国庭園にとれば、後藤朝太郎『支那庭園』¹⁵⁾に次の様に述べられている。

「支那庭園の美は設計そのものの優秀なる点を賞すべきは勿論であるがしかしそれより古色の点である。自然の時代的錆というものは支那芸術一般の上に少なからぬ重みを加えているものである。時には極端に云うと崩壊しひどく荒廃してしまった庭でも、その古色の十分加わっているという点で、その荒廃ぶりが却って幽趣を唆り月下に古人の庭池が眺められるなど詩情豊かな場面になることさへもある。それくらい古色は庭園の錆を考えさせる上に大事なものとなっている。」(傍点筆者)

後藤は以上のように「庭園の価値」を論じる筆頭に「自然の古色」を挙げて重視しているのである。

6. 廃墟の美と Aging — 造園の時間美

谷川徹三¹⁶⁾は、庭園は芸術か？を論じるなかで、「庭の媒材の特殊性は錆に於いても明瞭にあらわれる。」と述べ、好ましい錆、そして廃墟の美を感じる人間の心を考察する。

「……錆は一般にあらゆる芸術品に作者の予期しない特殊な美、落付きや深さや奥床しさを与えるものであるが、それにもかかわらず、或いは美しい色彩が褪せ、或いは明らかな輪廓がぼやけ、或いは大理石の肌が滑らかさを失っているのを見ると、われわれはそこに一種の破壊力、もしくはそれに似た力を感じる。……しかるに庭に於いてはそれと異っている。われわれは庭の錆に於てもすこしも自然の破壊力を感じない。……一般にいわれる庭の錆——地面や石に苔の適宜につくことは、この国の庭苑の美のほとんど必須の条件であって、それは庭苑作者の最初から意図し期待しているところであるように見える。かような関係は、自然力が錆として以上に働く場合、即ち露骨に破壊の力を示すにいたった場合に於ても異ならない。われわれは廃苑に対して自然の破壊力を感じない。むしろ、ものが自然にかえったという安静さをさへ感じる。……」

以上、谷川は、錆は庭園以外にも存在する Aging として特殊な美をもたらす点を指摘した上で、庭園では、かなりの程度 Aging による変質——時には廃苑になるほど破壊されても——それが自然な美として受容られることを述べる。絵画や彫刻の剝落は、人間の努力の空しさや、精神が自然にうち敗れたことを感じさせるが、庭園の場合はちがう、というのである。

結局、庭苑というものは「精神の自然支配」でもないし「自然の精神支配」でもない、とするのだが、本論の流れで捉えれば、それ故に「自然」と「精神(＝人間意

志の造形的表現としての造園)」がバランスをとっている「庭園」では、それが崩壊していった「廃園」になっていくこともダイナミック・バランスの範囲内にあって、われわれ人間に精神的平静さをもたらしている、と理解してよいのだろう。

谷川の目的は、庭園芸術の特殊性を考察する点にあったのだが、上記引用の中で、精神が勝っている絵画や彫刻の世界と、そうでない庭園の世界では、人間が作ったもの(＝精神作用の結果としての形)が時間の流れで破壊されてゆくとき、感じ方が異ってくるという点は重要な指摘である。

ヨーロッパ、例えばドイツのシュベチンゲン庭園(18世紀後半)などに“人工の廃墟”たとえばローマの水道橋や神殿などが作られた。

意図的に、人工の廃墟を作るのは、2章で既に述べたように、「時間の流れ、つまり歴史というものを味わうことで、人々は自ら有限の生命しかもたない生物であることをもふまえた上で、特別の感傷作用が惹起されるのを知っている」からである。

乾燥した気候で、在っても年に一ヶ月未満程度の微世界しかないヨーロッパであれば尚のこと、時間の流れ・歴史を人為的に“廃墟”という形でわざわざ作らなければならなかったのではないか。

先述したように、日本の建築は湿気を否定する形で様式を完成した(高床式など)が、日本の庭園は湿気を肯定する形でその造形美を特徴的なものにしていった。この例で言えば、乾燥風土のヨーロッパでは、人為的に“Aging”を感じる世界を再現する形(＝廃墟の庭園意匠)で、有限の生命しかもたない生物の人間の時間体験を満たそうとしたと言えるだろう。

生物としての人間にとって不可欠な環境的・精神的安定性を付与するために、造園環境の基調は、空間的・時間的座標感覚を充足するものでなければならない。それは大きな環境の変化、空間の変化、時間の変化によって生物的機能が侵される存在であることから類推される。¹⁷⁾

日本庭園の Aging、つまりは“さび”や、西洋庭園の Aging、つまりは“庭園につくられた人工の廃墟”は、不安定な存在としての人間に、精神面で時間的安定効果をもたらし、又、時間美を表出する役割を果たした。

7. まとめ — 日本の美意識の複合的性格

本論は、Aging 概念の導入により、わびさびの日本庭園美の内容をわかり易い論理で説明できるように試みた。同時に、Aging(時間的積層性)が造園計画における重要な本質的要素であることも強調した。尚、日本における Aging の美は、「風土——自然」と「歴史文化——時間」双方の交点に形成されたものである。その具体例は以下に述べるが、自然・時間による多層なものが複合し

重層した美意識が形成されてきた点に、日本の特質を指摘できる。先ず、わび・さびについて西田正好¹⁸⁾は、「中世の“わび”の枯淡美は、現実世界の華麗美をもとり込んで、新しい近世の“さび”の美へと弾力的に変身した。“さび”は、“わび”の近世的自己発展の所産であったといってもよい。」と書いている。これは『去来抄』に対する考察にもとづくのだが、筆者には、次々に前の時代までの美意識から意匠まであらゆるものを複合させながら新時代に適合した美意識や造形を完成してゆく複合的・重層的特質の例証のようにみえる。又、上代の“まこと”、古代の“みやび”が春夏の自然美を、古代の“あはれ”、中世の“わび”が秋冬の自然美を反映している点には、風土と時代と季節の相互作用の結果としての美意識をみる。“Aging”は以上の意味からも日本の特質を示すキーワードであるといえよう。

文 献

- 1) 金子九郎, 日本庭園試論, (丹羽鼎三記念出版会編, 日本文化としての庭園, 所収) 誠文堂新光社, 1968 P. 116
- 2) 文献 1) P. P. 116 ~ 7
- 3) 丹羽鼎三, 日本文化としての庭園(写意庭園の項) 誠文堂新光社, 1968. P. 50
- 4) 文献 3) P. 50
- 5) 栗山理一編, 日本文学における美の構造, 雄山閣 1976.
- 6) 相良享・尾藤正英・秋山虔編, 講座日本思想 5, 美, 東京大学出版会, 1984.
- 7) 数江教一, わび, 侘茶の系譜, 塙書房, 1973. PP. 8 ~ 9
- 8) 岡本太郎, 今日の芸術, 時代を創造するものは誰か, 光文社, 1954. PP. 199 ~ 200
- 9) 工楽善通, 平城京, (坪井清足編, 発掘・奈良, 国文学解釈と鑑賞 別冊所収, 至文堂), 1984. 4. PP. 35 ~ 6
- 10) 熊倉功夫, 茶の湯における美意識, すき・わび・やつし, (日本人の美意識, 季刊日本思想史第9号所収), ペリかん社, 1978. 11. 56 ~ 9
- 11) 文献 7), PP. 259 ~ 61
- 12) 河野善雄, 然び・侘び・撓り, 芭蕉美学を中心として, (日本人の美意識, 季刊日本思想史第9号所収), ペリかん社, 1978. 11. PP. 77 ~ 86
- 13) 文献 12) P. 80
- 14) 大江新太郎, 宝物の保存と蔵の智識 (建築雑誌, 昭和10年9月号, 大江新太郎君を弔ふの記事中・遺稿として本人が謄写刷として昭和9年6月発行のものが収録されている。) 建築雑誌, 1935. 9. PP. 8 ~ 13
- 15) 後藤朝太郎, 支那庭園, 成美堂書店, 1934. PP. 198 ~ 201
- 16) 谷川徹三, 庭苑, 生活・哲学・芸術, 岩波書店, 1930. PP. 51 ~ 4
- 17) 進士五十八, 緑からの発想, 思考社, 1983. P. 106
- 18) 西田正好, 日本美の系譜, 創元社, 1979. PP. 232 ~ 3, P. 342

Summary : The beauty and the meaning of “aging” in Japanese gardens have been argued to be primarily in “beauty based on space” such as colours, forms etc. . However the characteristics of mentality such as “Wabi and Sabi” which is a characteristic of Japanese gardens is found in “beauty based on time”. Natural rocks and trees rot and/or become musty with time under the monsoon climate. Therefore in Japanese gardens which are mainly made with natural materials, it is found an essential characteristic of beauty to be the “aging”, that is, changing of the features of materials which we see. Though this tendency is not so outstanding in European gardens, garden ornaments such as “manmade ruins” in European gardens have been constructed. The idea, which takes “aging with time” as one of the elements of beauty of landscape is therefore considered inherent in humanbeing.